

太宰府万葉歌碑めぐり

遠とおの朝廷みかどと称された太宰府は、今も万葉びとの生命いのちが息づいています。

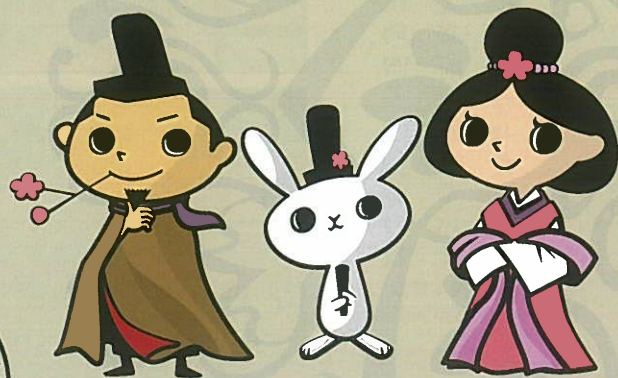
政庁跡・大野城跡・水城跡・観世音寺などの古跡こせきにたたずむと、

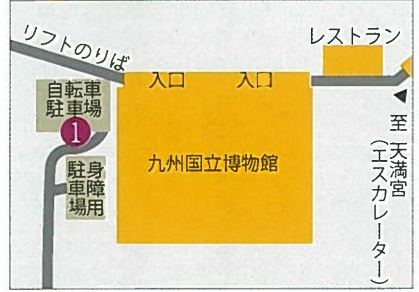
おとものたびとやまのうへのおくら しゃみのまんせい
大伴旅人・山上憶良・沙弥満誓たちの歌声が、

千三百年の時を超え、私たちの耳に響いてきます。

筑紫路を散策し、歌碑をめぐりながら、

万葉びとの息づきを感じとってください。





日本で最も古い歌集『万葉集』には約四五〇〇首の歌が集められています。その中には大宰府や筑紫で詠まれた歌がなんと約三二〇首もあるのです。なぜたくさんのお歌が大宰府の地で詠まれたのでしょうか？

今から約一三〇〇年前の大宰府には、地方最大の役所「大宰府」が置かれていました。外国使節を迎えるという大切な役割を担っていた大宰府には、位の高い役人や教養のある人物が多く集まっていたのです。

大陸や都からの人・ものの流入も相まって、大宰府は文化の交流が非常に盛んな場所だったのでした。

万葉集に集められた歌からは、当時大宰府の地にいた人々の姿が見えてきます。四季折々の風景や、酒を愛でる官人たち。大宰府を守る役割を担い、遠く離れた故郷や家族を想う防人たち。都を懐かしむ役人。

都に戻るにあたって大切な人との別れを悲しむ人びと。

そして、唐から渡来した梅を見ながら和歌を詠むという、新しい文化も生まれました。大伴旅人によって開かれた「梅花の宴」は、「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という新しい時代の願いを込められて、元号「令和」の典拠となっています。

- 19
- 20
- 21
- 22
- 23
- 24
- 25
- 26
- 27
- 28

- 29
- 30
- 31
- 32
- 33
- 34
- 35
- 36
- 37
- 38
- 39
- 40
- 41
- 42
- 43
- 44

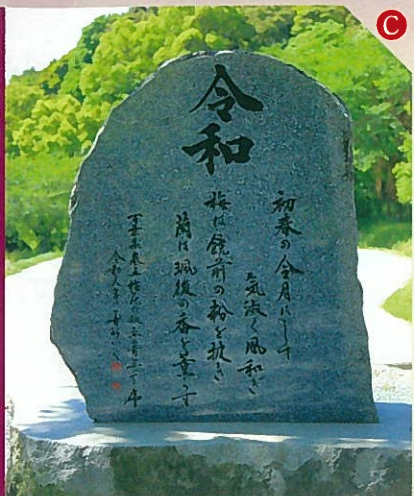
太宰府メモリアルパーク

市内には、「令和」改元を記念して、4つの梅花の歌序文の石碑が建立されています。

大伴旅人は大宰帥(大宰府の長官)として赴任し、天平二年(七三〇年)、自身の邸宅に大宰府や九州諸国の役人らを招いて、当時大変高貴とされた梅花の花をテーマに歌を詠む、「梅花の宴」を開きました。元号「令和」は『万葉集』「梅花の歌三十二首序文」にある、「初春令月、氣淑風和。梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香。」の文言を引用したものです。



太宰府市役所



坂本八幡宮



大宰府政庁跡(大宰府展示館横)



太宰府メモリアルパーク

【読み下し文】

天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まりて、宴会を申さき。時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫ず。加之、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封められて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁帰る。ここに天を蓋とし、地を座とし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然に自ら放にし、快然に自ら足る。若し翰苑あらぬときには、何を以ちてか情を攄べむ。請ふ落梅の篇を紀さむ。古と今とそれ何そ異ならむ。園の梅を賦して聊かに短詠を成す宜し。

(参考文献:太宰府市「太宰府市史文芸資料編」)

【口訳】

天平二年(730)正月13日、帥老の宅に集まって宴会を開く。あたかも初春のよき月、気は麗らかにして風は穏やかだ。梅は鏡台の前のお白粉のような色に花開き、蘭草は腰につける匂袋のあとに従う香に薫っている。しかも、朝の嶺には雲が動き、松は雲の薄絹を掛けたように傘を傾ける。また夕の山河には霧が立ちこめ、鳥は霧の縮み絹に閉ざされたように林に迷い飛ぶ。庭には生まれたばかりの蝶が舞い、空には去年の秋に来た雁が北に帰って行く。さてそこで、天空を覆いとし大地を敷物としてくつろぎ、膝を寄せ合っては酒盃を飛ばす如くに応酬する。一堂に会しては言葉忘れ、美しい景色に向かっては心を解き放つ。さっぱりとして心に憚ることなく、快くして満ち足りている。詩歌を他に、この思いを何によって述べようか。詩には落梅の篇を作るが、古も今もどんな違いがあるか。さあ、園梅を詠んで、ここに短き歌を試みようではないか

(参考文献:岩波書店「新日本古典文学大系」万葉集二)



ここにありて 筑紫やいづち
白雲の たなびく山の
方にしあるらし

作者/大伴旅人
口訳/ここ(大和)から見て、
筑紫はどこの方角だろう。
白雲のたなびく山の方
であるらしい。

巻四・五七四



我が園に 梅の花散る
久方の 天より雪の
流れ来るかも

作者/那何列久流加母
口訳/主人(大伴旅人)
わが家の庭に梅の花が散っている。
天から雪が流れて来るのであろうか。

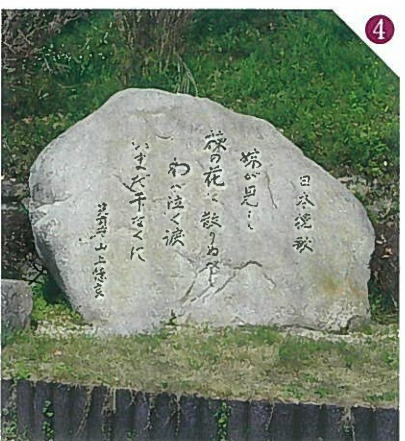
巻五・八三二



万代に 年は来経とも
梅の花 絶ゆることなく
咲き渡るべし

作者/筑前介佐氏子首(佐伯子首)
口訳/永久に年は来て過ぎて行くと、
梅の花は絶えることなく
咲き続けることであらう。

巻五・八三〇



妹が見し 棟の花は 散りぬべし
我が泣く涙 いまだ干なくに

作者/山上憶良
口訳/妻が見た棟の花は
もう散ってしまっそうだ。
私の泣く涙はまだ乾かないのに。

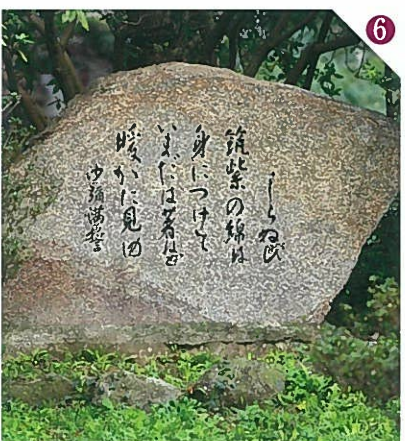
巻五・七九八



春されば まづ咲くやどの 梅の花
ひとり見つつや 春日暮らさむ

作者/波流比久良佐武
口訳/筑前守山上大夫(山上憶良)
春になると真っ先に咲く庭の
梅の花を、一人で見ながら
春の日を暮らすことであらうか。

巻五・八八八



しらぬひ 筑紫の綿は
身に付けて いまだは着ねど
暖かく見ゆ

作者/造筑紫観音寺別当沙弥満誓
口訳/筑紫の綿は、
まだ身につけていないが、
暖かそうに見える。

巻三・三三六



瓜食めば 子ども思ほゆ
粟食めば まして徳はゆ
いづくより来たりしものそ まなかひに
もとなかかりて安眠しなさぬ

作者/山上憶良
口訳/瓜を食べると子どもが思われる。
粟を食べるとまして徳はれる。
いったい何処からやってくるのか、
面影が眼前にむやみにちらついで、
安眠させてくれない。

巻五・八〇二



大君のまの朝廷と
あり通ふ
島門に見れば
神代し思ほゆ

作者/柿本人麻呂
口訳/大君の、遠く離れた政庁として
通い続ける海峡を見ると、
神代の昔が思われる。

巻三・三〇四



やすみしし 我が大君の 食す国は
大和もこころも 同じと思ふ

作者/大伴旅人
口訳/わが大君のお治めになる国は
大和もこの筑紫も同じだと思う。

巻六・九五六



あをによし 奈良の都は
咲く花の にほふがごとく
今盛りなり

作者/小野老
口訳/奈良の都は
咲く花が美しく薫るように
今が真つ盛りである。

巻三・三二八



正月立ち 春の来らば
かくしこそ 梅を招きつつ
楽しき終へめ

作者/大式紀卿(紀真人)
口訳/正月になり春が来たなら、
こうして梅を招きながら、
楽しさの限りを尽くそう。

巻五・八五五



世間は 空しきものと
知る時し 悲しかりけり
いよよますます

作者/大伴旅人
口訳/世の中はむなしなものだつくづく
知る時、いよよますます悲哀の
感を新たにすることだ。

神龜五年六月十三日
巻五・七九三



我が岡に さ雄鹿来鳴く
初萩の 花妻問ひに
来鳴くさ雄鹿

作者/大伴旅人
口訳/わが岡に雄鹿が来て鳴いている。
初萩の花を妻として訪ねようと、
来て鳴く雄鹿よ。

巻八・五四二



大野山 霧立ち渡る
我が嘆く 息その風に
霧立ち渡る

作者/山上憶良
口訳/大野山に霧が立ちこめている。
私が嘆くため息の風によって
霧が立ちこめている。

巻五・七九九



凡ならば かもかもせむを
振りたき袖を 忍びてあるかも

作者/児島娘子
口訳/あなたが普通のお方なら
あれこれいたしますが、
恐れ多いので、
振りたき袖をこらえています。

巻六・九六五



秋の野に 咲きたる花を
指折り かき数ふれば
七種の花

作者/山上憶良
口訳/秋の野に 咲いている花を
指を折って 数えてみると
七種類の花がある

巻八・五三七



萩の花 尾花葛花 なでしこが花
をみなへし また藤袴 朝顔が花

作者/山上憶良
口訳/萩の花 尾花 葛の花
なでしこの花 女郎花
さらに藤袴 朝顔の花

巻八・五三八



梅の花 咲きて散りなば
桜花 継ぎて咲くべく
なりにてあらずや

作者/薬師張氏福子(張福子)
口訳/梅の花が咲いて散ったら
桜の花が継いで咲きそうに
なっているではないか。

巻五・八二九

太宰府歴史スポーツ公園



19
筑紫なるにほふ見故に
陸奥の香取娘子の結ひし紐とく
作者 未詳
口訳 筑紫の美しい娘ゆえに、
陸奥の香取娘子が結んでくれた
衣の紐を解くことよ。
巻四・三四二七

20
妹が見し 棟の花は 散りぬべし
我が泣く涙 いまだ干なくに
作者 山上憶良
口訳 妻が見た棟の花はもう散ってしま
いそうだ。
私の泣く涙はまだ乾かないのに。
巻五・七九八

21
いちしろく しぐれの雨は 降らなくに
大城の山は 色付きにけり
作者 未詳
口訳 目立つほどに時雨は降らないのに、
大城の山は色ついたなあ。
巻十二・二九七



22
湯の原に 鳴く葦鶴は
吾がごとく 妹に恋ふれや
時わかず鳴く
作者 大伴旅人
口訳 湯の原に 鳴く葦鶴は、
私のように 妻を恋慕うからか、
時の区別なく いつも鳴いている。
巻六・九六一

23
橘の花散る里の ほととぎす
片恋し一つ 鳴く日こそ多き
作者 大伴旅人
口訳 橘の花の散る里のホトトギスは、
片恋をしながら鳴く日が多いことです。
巻八・四七三

24
銀も 金も玉も なにせむに
まされる宝 子に及かめやも
作者 山上憶良
口訳 銀も金も珠玉も何になろう。
どんな優れた宝も子に及ぼうか。
及びはしないのだ。
巻五・八〇三

25
古の七賢しき 人たちは
欲りせしものは 酒にありあらし
作者 大伴旅人
口訳 古の竹林の七賢人たちは、
欲しがったものは酒であつたらしい。
巻三・三四〇



36
梅の花散らくはいつく
この城の山に雪は降りつづ
大監伴氏百代



35
我が園に梅の花散る
久方の天より雪の流れ来るかも
大宰府大伴御



34
春さればつばきく雪つ梅つ花
ひらえつや春の暮りし
大宰府山上大人



33
秋の野に咲きたる花を
指折りかき数ふれば七種の花
おまひの
ななくく



32
秋の花尾花葛花
なでしこが花
をみなへし
また藤袴 朝顔が花
大宰府山上大人
尾花 葛花
なでしこの花 女郎花
さらに藤袴 朝顔の花



31
春の野にすみれ摘みにと
来し我そ
野をなつかしみ 一夜寝にける
大宰府山上大人
春の野にすみれを摘もうと思つて
やつて来た私は、野に魅せられて
そこで一夜寝てしまった。



30
忘れ草 我が紐に付く
香具山の古りにし里を
忘れむがため
大伴旅人
口訳 忘れ草を私の下紐に付ける。
香具山の故郷を忘れるために。



29
路の辺の志師の志のいしろうく
人皆知りぬ 我が恋妻は
大伴旅人
口訳 道はたのいししの花ではないが、
いししろくはつきりと
人は皆知ってしまった。
私の恋い慕う妻のことは。



37
春の野に霧立ち渡り
降る雪と 人の見るまで
梅の花散る
大宰府山上大人
口訳 春の野に霧が立ちこめて、
雪が降っているのかと
人が見間違えるほどに、
梅の花が散っている。



38
大君の遠の朝廷と
しらぬひ筑紫の国に
泣く子なす 暮ひ来まて
息だにもいまだ休めず
年月もいまだあらねば
心ゆも思はぬ間に
うちなびき 臥やしぬれ
言はむ術せむ術知らに
石木をも問ひ放け知らず
家ならばかたちはあらむを
恨しき妹の命の
我をばもいかにせよとか
にほ鳥の二人並び居
語りひし心そむきて
家離ります
神龜五年七月二十日
卷五・七九四



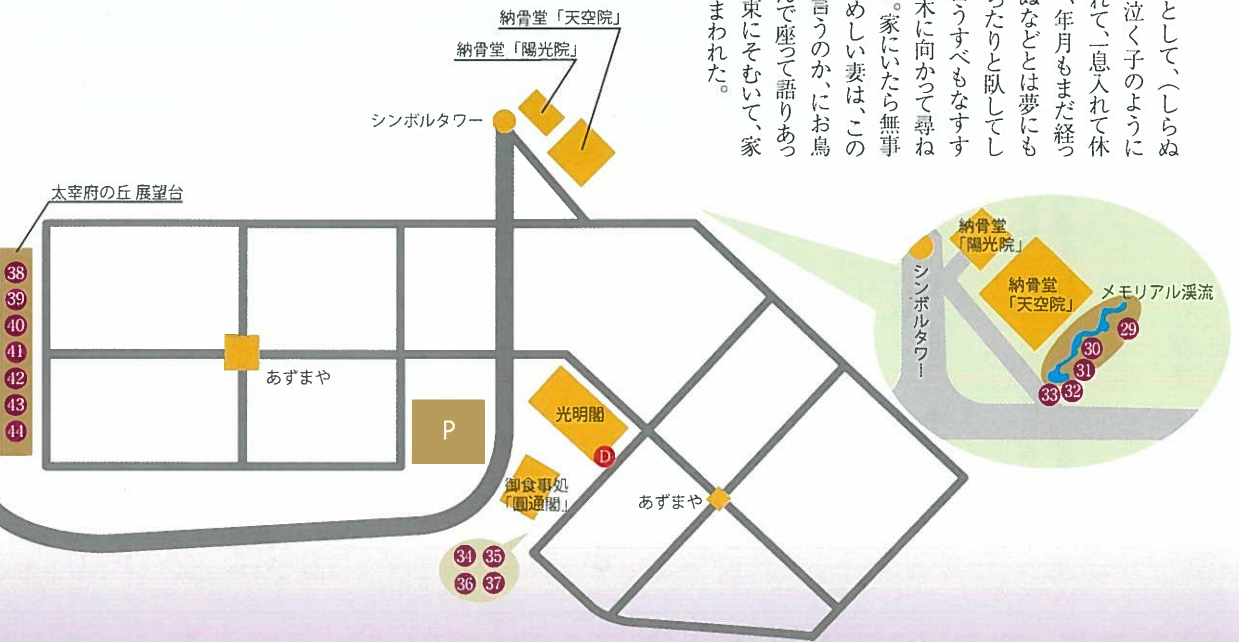
39
日今後世に
大君の遠の朝廷と
しらぬひ筑紫の国に
泣く子なす 暮ひ来まて
息だにもいまだ休めず
年月もいまだあらねば
心ゆも思はぬ間に
うちなびき 臥やしぬれ
言はむ術せむ術知らに
石木をも問ひ放け知らず
家ならばかたちはあらむを
恨しき妹の命の
我をばもいかにせよとか
にほ鳥の二人並び居
語りひし心そむきて
家離ります
神龜五年七月二十日
卷五・七九四



39
日今後世に
大君の遠の朝廷と
しらぬひ筑紫の国に
泣く子なす 暮ひ来まて
息だにもいまだ休めず
年月もいまだあらねば
心ゆも思はぬ間に
うちなびき 臥やしぬれ
言はむ術せむ術知らに
石木をも問ひ放け知らず
家ならばかたちはあらむを
恨しき妹の命の
我をばもいかにせよとか
にほ鳥の二人並び居
語りひし心そむきて
家離ります
神龜五年七月二十日
卷五・七九四

太宰府メモリアルパーク

29 ~ 44



作者 山上憶良
大意 大君の遠い政庁として、(しらぬひ)筑紫の国に、泣く子のように慕つてやって来られて、一息入れて休む間もまだなく、年月もまだ経っていないのに、死ぬなどは夢にも思わない間に、ぐったりと臥してしまわれたので、言うすべもなすすべも分らず、岩や木に向かって尋ねることもできない。家にいたら無事だったろうに、恨めしい妻は、この私にどうせよと言うのか、にお鳥のように二人並んで座つて語りあった借老同穴の約束にそむいて、家を離れて行つてしまわれた。



42



41



40

久夜斯可母 可久助良摩世婆
阿乎尔与斯 久奴知許等其音
美世摩斯母乃乎

作者/山上憶良
口訳/悔しいことよ。こんなことになる
知つていたら、(あをによし)園中を
すべて見せてやるのだったのに。

悔しかも かく知らませば
あをによし 国内ことごと
見せましものを

卷五・七九七

愛しきよし かくのみからに
慕ひ来し 妹が情の
すべもすべなき

作者/山上憶良
口訳/ああ、いとしいことよ。
こんなにはかない命だったのに、
私を慕つてやって来た妻の心が、
どうしようもなく哀れなことよ。

愛しきよし かくのみからに
慕ひ来し 妹が情の
すべもすべなき

卷五・七九六

家に行きて いかにか我がむ
枕づく つま屋さぶしく
思ほゆべしも

作者/山上憶良
口訳/家に帰つて、私はどうしたらいいのか。
寝室が寂しく
思われるに違いない。

家に行きて いかにか我がむ
枕づく つま屋さぶしく
思ほゆべしも

卷五・七九五



44



43

大野山 霧立ち渡る
我が嘆く 息その風に
霧立ち渡る

作者/山上憶良
口訳/大野山に霧が立ちこめている。
私が嘆くため息の風によって
霧が立ちこめている。

大野山 霧立ち渡る
我が嘆く 息その風に
霧立ち渡る

卷五・七九九

妹が見し 棟の花は 散りぬべし
我が泣く涙 いまだ干なくに

作者/山上憶良
口訳/妻が見た棟の花はもう散つてしま
いそう。私の泣く涙はまだ乾かない
のに。

妹が見し 棟の花は 散りぬべし
我が泣く涙 いまだ干なくに

卷五・七九八



このマークは、「梅花の宴」で詠まれた歌
『万葉集』の「梅花の歌」に収録されている歌です。



JAPAN HERITAGE
日本遺産



「万葉集つくし歌壇」は日本遺産、
市民遺産に認定されています。

発行・問合せ 太宰府市
編集 大宰府万葉会代表 松尾セイ子

題字 山内勇哲
監修 坂本信幸